

②「内政と対外政策 —中国対外政策研究における基本問題—」

講師：牛軍 氏（北京大学国際関係学院教授）

日時：2007年11月21日（金） 14:30-16:30

場所：慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟7階会議室

言語：中国語

報告要旨：中国外交は総じて、国内要因と国際要因が相互作用のなかで決定されたものである。だが、その根本はやはり国内要素であり、特に次の3つの要素が重要である。①革命の歴史：中国における革命運動の歴史的遺産、革命の目標、思考方法や行動様式は、今でも中国外交に決定的な影響を与える。②国内政治：高層政治レベルでの組織的な矛盾と闘争、ある時期における社会風潮、国家レベルでの戦略調整・転換などは、外交政策に変化をもたらす。③近代的な民族国家建設：主権と領土、国家の統一とそのため文化建設、発展目標としての国家経済や社会の近代化、社会の核心的価値と国家アイデンティティの形成、政府の合法性の確立など、発展や認識の問題も外交に影響を与える。

牛軍氏は特に、革命の歴史と国家レベルでの戦略調整の2つに重点をおいて説明した。すなわち、革命運動の歴史的遺産は、中国外交に主に3つの側面から影響していることを述べた。第1に、中共による革命運動の目標は、共産党成立以来、独立という内部的な目標と同時に、新しい国際システムの建設という外部的な目標を持っていた。第2に、「独立自主」という目標は繰り返し共産党大会で強調され、その一方、外部からの干渉にはきわめて敏感である。第3に、革命運動の経験から形成された世界観や言語表現は、いまだに指導者層に生き生きと存在している。最後に事例として、78年中国の改革開放という戦略的な転換が、外交政策にはやや遅れて、(82年、87年、92年)と国家安全戦略(85年)にはさらに遅く反映したことを指摘した。

質疑応答においてはフロアより、これから中国外交に影響が増大しつつある、利益集団と地方政府の役割、中国外交における米国の影響、国外の要素が中国外交を大きく左右した事例とその証明はどのようにすべきか、といった点が指摘された。さらに「国家安全戦略」という語彙の適用性、中国の被害者意識が外交に与える影響、社会的コアバリューとナショナリズムの関係性などについて議論が行われた。